

令和元年度



学校だより

伸びよう 豊かに たくましく ~学ぶ喜びにあふれた学校をめざして~

令和元年6月26日
横浜市立高田小学校

7月号

「七夕の飾り」

校長 金子 一雄

梅雨の季節になりました。今年は、しとしとと何日も長く雨が続くということではなく、合間、合間に青空と太陽が覗く日があり、すごしやすい梅雨だと感じています。これからくる、暑さ厳しい夏のことを思うと、「しばらくこのような天気が続いてもよいかな」と思ったりしています。このような天気のおかげもあり、各学年の校外行事も順調に進み（4年生の宿泊では、近隣の事件により、一部のプログラム変更があり残念でしたが）、前期は残すところ、6年生の修学旅行のみとなりました。

校外行事は、様々な体験をする場として教育的な意義や価値が高い取組です。児童にとって学校を離れ、その場所に行くことは、楽しいだけでなくよい刺激となります。また、学級の授業での学びを深める役割ももっています。例えば、3年生は、遠足で豊かな自然が残る公園に行き、そこで自然観察を行ない、理科で学習する生きものについての学習を深めました。また、4年生は、水道についての学習につながるダムに行き放流を見学しました。5年生は、三崎のマグロのせり場や日産の自動車を作っている工場を見学しました。

さらに、目的地での学習だけでなく、途中では訪れる場所や通過する場所も非常に大きな意味もっています。港町や学校近くとは違った町、宿泊場所の様子を感じたり、様々な人たちの話を聞いたり、お世話になったりするときコミュニケーションをとることも、児童にとって日常の学校生活にはない貴重な場にもなっています。

この密度の濃い体験がつまった遠足、社会見学、宿泊行事をこれからも大切にしていきたいと思えます。

7月を迎えるにあたり、図書室に七夕の「ささの葉」が飾られています。子どもたちが「自分の夢や願い」を短冊に書いてそれに飾ることができます。日本で、昔から続くこの風習、子どもたちにとっては、とても珍しく思えるようで、備え付けの説明文を読み、その前で「なんて書こうか」と思案する子が何人もいます。何枚かの短冊がすでに飾られており、「～さんとなかよくあそべますように」などかわいらしい願いが書かれています。七夕は、旧暦の7月7日に、天の川を間に挟む、織女星（こと座のベガ）と牽牛星（わし座のアルタイル）が、もっとも明るく光ることから、中国でこの日を特別視し、七夕伝説が生まれました。それが日本に渡り、彦星と織姫の逸話になり、1年に一回願いがかなう日といわれるようになったようです。

日本だけにあるこの風習は、子どもたちにとってたいへんよいものだと思っています。子どもは、この短冊を書くとき、まず、自分の心の中に入って、自分との対話を始めます。「いま自分は何をしたいのか、それをかなえるには、どうしたらよいか」などと思いをめぐらせ、何を短冊に書こうか考えます。こういうことが自分の目標をはっきりさせたり、再認識させたりすることになり、自分について振り返るよい機会となります。低学年の子どもの振り返りは直感的で、ストレートですが、書くという行為で改めて自分の思いを確認することができます。高学年になればなるほど、その思考は複雑になります。書いた内容を多くの人に読まれることを意識して、自分の気持ちをどのように書いたら（表現したら）伝わるか多くの子は、考えるようになります。「ささの葉」前で「何を書こうか」思案する子どもたちは、それだけ自分のことについて深くみつめていることとなります。大人は、もっと素直に思いのまま書けばと思いがちですが、子どもたちは何をどのように書くかを頭の中で整理することで自分を振り返り、社会とのつながりを考えていきます。「自分の思いをしっかりと意識し、社会の中でそれをどのように表現することは、これから生きていく社会の中では、大切な資質のひとつだと思います。図書室の「ささの葉」の短冊には、ひとりひとりの子どもの深い思いが込められているということを忘れずにしっかりと読んであげたいと思います。